



新たな年を迎え、私は宇宙という壮大なロマンに胸が高鳴っていた。南米チリにある世界最大のアルマ望遠鏡53台のアンテナを用いた観測が始まると知ったからだ。

しかし、その陰に1人の日本人天文学者の命と、そのご家族の涙があったことをまだ知る由もなかった。

国立天文台チリ観測所教授だった森田耕一郎さんは、アルマ天文台で望遠鏡システムの性能評価を行う国際チームのリーダーだった。その本格観測開始目前の平成24年5月7日、サンティアゴの自宅前で暴漢に襲われ、日本に家族を遺したまま58歳で急逝された。

彼は大のクラシックファンでもあった。自らビオラを弾き、ピアニストの奥さまとの出会いも音楽を通じてだったそうだ。

今年1月6日、東京文化会館小ホールでの「森田耕一郎メモリアルコンサート」は、

森田耕一郎さんの偉業…音に乗せて



そんな彼を慕って、日本だけでなく、海外からも集まった仲間たちによって行われた。

私はこのコンサートを聞き、思わず息をのんだ。「この人こそ、新たな宇宙の扉を開けた方なのだ」と。

森田氏の絶大なる功績をたたえ、彼が設計したアルマ望遠鏡の日本分担部分は「モリタアレイ」と命名され、火星と木星の間にある小惑星は「Kohichiro」と名付けられた。森田氏の魂は宇宙に永遠に刻まれたのだ。

コンサートでの基子夫人のドビュッシー「月の光」のピアノ独奏は、まさにご主人に語りかける姿そのものの美しさだった。音楽は無言の愛であり、魂を結ぶ奇跡だと確信

した。今思い出しても涙があふれるほどに感動的だった。

きっとお二人はこうして輝く月をながめながら、宇宙や未来の夢を語り合っていたのかもしれない。技術は人の想いを伝えるためにある。しかし、一番大切なことは、根底にある真摯な想いこそが常に演奏の動機になるべきだということだ。

プログラムには優しい森田氏の笑顔と「宇宙は、地球から離れるにつれ、科学から化学、そして芸術の領域に入っていくんです」という言葉が記されていた。

(さとう・しのぶ=声楽家)

—毎月第3金曜日掲載

